

生きる力が身に付く教育

ーコミュニケーション能力の育成を中心にー

学籍番号 159973
氏名 上垣内 崇裕
主指導教員 岡 博昭

1. コミュニケーション能力を育成する意義

21世紀は知識基盤社会の時代であるとともに、グローバル化が一層進む時代である。それに伴い、国の枠を越えた人間関係の形成と異なる価値観の共有が求められるようになってきた。つまり、異なる価値観を持つ他者と対話を行い、互いの意見やアイデアを共有して、様々な課題を解決していかなければならない多文化共生の時代を迎えたのである。多様な人との関わりが求められる多文化共生の時代において、人間関係形成の基盤となる最も重要な能力が「コミュニケーション能力」である。これは、経済協力開発機構（OECD）が子どもたちに必要な主要能力（キーコンピテンシー）の1つとして「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を挙げたことに加え、企業が近年の新卒採用においてコミュニケーション能力を最も重視していることから明らかである。従って、社会への窓口にあたる高等学校において、生徒らが激動する社会の中で生き抜くために必要な力としてコミュニケーション能力を育成することは、極めて重要な教育課題である。

2. 本研究の目的

コミュニケーション能力の定義は多岐に渡り、どれも異なる解釈がなされているが、本研究ではコミュニケーション能力を「要素①：価値観の異なる他者を対等な個人と認める態度」と「要素②：他者と対話を行い価値観や情報を共有する能力」の2つの要素から成るものと捉えた。これに基づいて育成に向けた取組みを考案し、学校現場での実践を通してその効果を検証するとともに、コミュニケーション能力の育成に求められる要素を明らかにすることを主な目的とする。実習校の生徒の実態把握から、上記の要素①は既に身に付いていると判断し、本研究では主に要素②の育成に取り組むことにした。

3. 基本学校実習Ⅱ

まず、基本学校実習Ⅱでは約半年間に渡って実践経験を積み、研究を進めるにあたり必要不可欠である筆者自身の授業力を高めた。同時に、「生徒同士の学び合い」を積極的に授業に取り入れ、生徒同士が関わる機会を増やすことで、コミュニケーション能力を育成しようと考えた。ここで深刻な問題となったのが時間不足である。板書に多くの時間を要したことなどが原因で、生徒が問題に取り組む時間が十分に確保できない状況が続いた。そこで、反転学習の手法や考え方を参考にして授業設計を行い、生徒同士が学び合う機会を確保しようと考えた。結果として、生徒の活動時間を十分に確保することができ、学び合いによる生徒同士のコミュニケーションを活発にすることができた。

4. 発展課題実習Ⅰ・Ⅱ

ここで筆者は「学び合いによる生徒同士の関わりは、『対話』をしていると言えるのか」と疑問を抱いた。本研究において対話は「他者との間で行われる価値観や情報の共有」としており、双方向のやり取りが重要となる。しかし、学び合いで行われているのは基本的に一方向の会話（説明）であるため、対話が行われているとは言い難い。そこで、発展課題実習Ⅰでは生徒同士の対話を意識した授業の考案、及び実践と評価を行うことを目的とした。対話は、相手の意見を聞き、受け止めて思考した上で、自身の意見を伝えるという双方向のやり取りで成り立っている。故に、対話において「聞くこと・話すこと」は極めて重要であり、これらを対話の要素として生徒に強く意識させようと考えた。何気なく行っている対話の過程を文字で書かせることで、普段よりも相手の意見を聞き、自分の意見を話すことを強く意識させる狙いがある。実践後、生徒のワークシートをループリックで評価した結果、教師の観察評価とほぼ同じ評価が得られた。これにより、ループリックの妥当性について一定の信頼が得られ、生徒同士の対話の度合いを成果物から客観的に評価することが可能であると明らかになった。また、対話の要素である「聞くこと・話すこと」を生徒に意識させることもできた。

一方で、授業の途中で生徒らの話し合いの度合いが大きく低下したことが課題として挙げられた。対話を行うのが生徒である以上、やはり生徒自身の主体性なしに活発な対話は望めない。そこで、生徒の主体的な対話を生み出す要素として、「生徒の興味関心を引き出す」、「対話に対して生徒が抱く抵抗感を小さくする」の2つを仮定し、これらを意識した授業設計と実践、評価を行い、その効果を検証することを発展課題実習Ⅱの目的とした。まず、興味関心を引き出す方法として「生徒にとって身近な題材を用いた実験で生徒の興味関心を引き出し、それにより生徒の主体性を高め、実験結果を予想する場面で生徒同士の対話を行わせる」という授業スタイルを考案した。また、生徒が対話に抵抗感を抱く理由を「自分の意見を持っておらず、対話に参加できなかった」と考え、生徒が予想を立てる場面で3つの選択肢を提示し、全ての生徒が予想を立てる（自分の意見を持つ）ことができるように工夫した。実践の結果、授業の観察評価と実験プリントの記述から、活発な対話の様子が確認された。また、生徒に行ったアンケート調査からは、実験に対する興味関心を高める要素として「視覚情報」と「身体動作」を取り入れることが効果的であること、多くの生徒が選択肢の存在によって予想を立てることにに対する抵抗感が減少したと実感していること、コミュニケーション能力の育成に関わる人間関係の形成や対話の経験は継続的に取り組むことが何よりも重要であることが明らかとなった。

5. 研究のまとめ

本研究では、筆者なりにコミュニケーション能力を定義し、実践的な育成方法の考案と効果の検証を行うことができた。それにより、理科でコミュニケーション能力を育成することは可能であると確認できたことは、学校教育の今後の方針に先駆けた意義のある成果だと言える。また、理科教員としても、生徒に実体験させて「直接見た、触れた、感じた」ことによる感動を与え、理科の本質に触れさせることの大切さを実感することができた。生徒の興味関心を引き出せるかは、教師がどれだけ魅力的な題材を提示できるかに掛かっている。筆者が学校現場に出てからも、教材研究に対して一層真摯に、情熱をもって取り組んでいく所存である。